神保美佳のメモ★ランダム ――― VOL.56

ますます好きです、新幹線！

MEMO★RANDOM

じんぼう・みか

法政大学卒業後、文具メーカー勤務を経て業界誌記者となり、1993年独立。
取材記事、コラムなど連載。近著「パチンコ年代記」（パジリコ、07年）

今年は、前回の東京オリンピック、そしてそれに付随するインフラ関連の50周年が、様々なメディアでクローズアップされています。私は1964年生まれなので、それらといわば「同い年」。そんなわけで、私自身もことさら50周年という記念の年が感慨深く思えるのは、自然な流れかもしれません。

今年で50周年の中でもやはり、「東海道新幹線」に関するイベントが身の回りで多いように感じられるのは、最もポピュラーな乗り物であるためでしょうか。新聞記事によれば、50年間で運んだ乗客数はのべ56億人だとか。その数字もさることながら、私も子供の頃すでに、よく新幹線の歌を歌いながら「時速250キロ」という途方もなく速いイメージを思い浮かべていたなぁ、すごいなぁと改めて実感します。確か、中学生の頃小田原から「こだま号」に乗って京都まで行ったのが初めての体験だったと記憶していますが、その特別感というかワクワク感はずっと心の片隅に残っています。

ちなみに当時一番驚いたのは、列車内に「水飲み場」があることでした。ペダルを足で踏んで出て来た水を直接飲む…という水飲み機？　は学校内にもありましたが、新幹線では一辺だけが飛び出した形の「折りたたみ紙コップ」の束が備えられており、それを1枚引き出して膨らませ、中に冷水機から水を入れて飲むようになっていたのです（写真等がなく、分かりづらくてすみません）。そんな非日常的な仕掛けが面白く、何度も水を汲んでは席と往復し、親に叱られたこともありましたね。

また、高校2年生の時には修学旅行で博多まで、片道7時間ほど乗車したこともありました。今考えると120人ほどの小規模な学校だったのに、どうして飛行機でなくわざわざ時間をかけて新幹線だったのだろう？　と、不思議な気持ちもします。しかし当時は仲のいい友人たちと新幹線にずっと乗っていられるのが楽しくて、当時まだあった食堂車の探検など、ちょっと羽目を外してしまったことも懐かしい思い出です。

社会人、特にライターの仕事を始めてからは取材で新幹線に乗る機会も増え、ある時乗車ホームの反対側に「黄色い新幹線」が停まっているのに驚き、そのことをインターネットで書くと、親切な方から「ドクターイエローという検査用の新幹線で、なかなか見られないものです」と、メールで教えて頂いたことも。そのドクターイエロー、今では様々なグッズが発売されているなどかなりの人気者になっているらしく、やはり皆、気になるものは同じなのだと感心します。

そんなさまざまな新幹線体験をしていた私ですが、先日、両親がさらに「上手」だったことを知りました。開業前年の1963年、父と母は新幹線の試運転会に参加していたのです。当時国鉄は用地買収に関わった関係者を招待して試運転を行っており、たまたま親戚が該当していた関係からチケット（というより、プリント）を入手できたとのこと。二人は鴨宮から乗り込んで前代未聞のスピードを体験し、非常に嬉しかったそうです。そんな話を聞いていると、もしかしたら私の新幹線好きは、ある種の「遺伝」なのかしら、とも思えて来ます（笑）。そして、楽しくメモリアルな出来事にちゃっかりと参加していた両親の当時の写真や様子を見ているうち、新幹線がより身近に感じられ、ますます好きになってしまうのでした。

1963年、鴨宮駅にて父が撮影した新幹線試運転の様子。中央やや左でポーズをつけているのが母です